

## 縁（えにし）

十年の歳月が幻のようであった。それは一瞬のようでもあり、長い長い道程のようでもあった。長い悪夢から突然覚めて安堵した者の気持ちにも似ていた。一つの感慨にようなものが私を支配していた。この人々の生活と笑顔を取り戻すためにこそ、文字通り多くの仲間たちの死を超えて、この十年を賭けてきたからだ。いや、「賭けてきた」と言えば嘘になる。なにものかに引きずられながら、自分でも予想だにしなかった遠くまで旅してきたような気がした。さながら曼荼羅のように、次々と新たな問いと困難に遭遇し、振り返れば日本から遠い地点に立っていた。

JAMSでの事業は今九十名以上の現地スタッフを抱え、四つの診療所を運営し、現地に根を下ろしてさらに活動的なものとなった。パキスタン北西辺境州のらい根絶計画への協力でも、我々の着手したらいいセンター改善は実を上げ、今では名実共に欠かせぬ唯一の治療センターとして機能している。一方、日本側の支持母体「ペシャワール会」の人々も、騒々しい「国際化」の時流をよそに、十年を黙々と共に歩み、現地事業を支え続けてきた。まさに、国境を越え、宗教を超え、異文化を超え、無数の良心の結晶と言っても誇張ではなかった。そうして、この縁でこそ、大切なものを見いだし、自らも喜びを共にしてきた。

「もし」という仮定で過去を振り返るのは徒労かも知れぬ。だが、もし私が一九七八年にピンズークツシユ山脈に登山隊について来てなかったら、もし現地と日本で多くの友人たちとの出会いがなかったら、もし私が少年時代に美しい蝶の羽の輝きに魅せられてなかったら、「もし……」と、際限もなく過去の出会いを思わずにはおれなかった。

多くの出会いと別れがあった。私をペシャワールとアフガニスタンの働きに結びつけた先輩や友人、現地での協力者たちの少なからぬ者が、今はこの世を去っていた。しかし、不思議なこと、ここで言えば、生きている者も他界した者も、このピンズークツシユの白峰を戴く壮大な自然に渾然と溶け合って、生死の垣根を越えて生き生きと私の心に語る。全ては縁の縊り合わせる摂理である。意識しようとするまいと、人が逆らうことができぬものなのだ。人はしばしば勝手に、自分で生きているように考える。だが、実は生かされているのだ——改めてそう思った。

私もまた、あの一九七八年のピンズークツシユとの出会い以来、相も変わらずその麓を巡り続けている。この先も、終わらなき旅は続くのだろう。

